

## 「かまじい」

美幌町立北中学校 三年 小原 誠心

「コトコト」「ジュージュウ」

店に入ると私の五感をくすぐるなじみの音といい匂い。それより先に「いらっしやいませ」と店中に響き渡る声。

私の祖父は隣町で『かまじい』というラーメン店を営んでいる。『千と千尋の神隠し』からその名をとったらしい。私は祖父の作るカレーラーメンが大好きだ。私の生まれる前からある店で、物心がついた時には、祖父がお客様に提供するラーメン作りを見ていた。

祖父はなぜラーメン屋になったのだろう。小さい頃、祖父に尋ねたことがあったかもしれないが、当時のことは記憶にない。

最近、家族で食べに行っって祖父と話をした時、ふとその疑問が思い浮かんだ。同時に、以前両親が、

「ラーメン屋さんのお手伝いをしたら？」

と言っていたのを思い出した。心の中で（チャンス！）と思い、私は店の手伝いをしたいと祖父に頼んだ。（手伝いをすることで、おじいちゃんのなぞを解き明かせるぞ）とワクワクしてきた。祖父の許可を得て、私は夏休みの間手伝うことになった。

手伝いは、まず掃除。そして祖父がいつも大切にしている挨拶も大きな声でやってみた。『『いらっしやいませ』の一言で、お店の印象は変わるんだぞ。』祖父はそう教えてくれた。

挨拶と笑顔。祖父は、常連さんと楽しく談笑したり、初めてのお客様には、丁寧に店のおすすめを紹介していた。何よりとても楽しそうに仕事をしていた。食べ終わったお客さんは「おいしかったよ。」と笑顔で帰って行った。

昼の休憩で祖父と昼食をとっていた時、祖父に聞いてみた。

「どんな時が一番嬉しい？」すると、

「お客さんがおいしかったと笑顔になってくれる時だよ。」

と返ってきた。確かに祖父は、お客さんが帰る時、嬉しそうな顔をしていた。私も笑顔になれる気がした。

そこでチャンス。「何でラーメン屋さんになったの？」と聞いてみた。祖父は左眼を失明し、仕事を辞めたこと、ちょうどその頃、祖母に料理を作ったらとても喜んでくれたことが、ラーメン屋を始めるきっかけだったと教えてくれた。

左眼が見えないことは知っていた。しかし、それがどんなに大きなことか、わかっていたいなかった。人生の途中で、こんなに大きなことが起こったら、きっと私は絶望してしまっていただろう。けれど祖父は、落ち込んでいたのではなく、四十八歳から起業した。前を向き、自分の好きなことに打ち込んでいる祖父。小さい頃からラーメンを作る祖父を見ていたが、その話を聞き、改めてカッコいいな、と祖父を尊敬し、誇りに思った。確かにラーメンの味、接客に深い愛情が込められているな、と感じた。大きな祖父の背中に、祖父のパワフルな人生が見えた。

私は将来医師になりたいという夢がある。職種は違うが、ラーメンを通して人とのつながりを大切にしてきた祖父のように、私は「命」を通して患者さんとのつながりを大切にしていきたい、と思った。祖父がお客さんと「深く」「美味しく」つながっているように、私も人の気持ちに寄り添えるような「愛」のある医師になりたい。

大好きな祖父の人生を聞き、私もこれからもっと、夢に向かって突き進んでいこうと思った。くじけそうになった時には、祖父のパワフルで愛情たっぷりのラーメンを食べに行こう。笑顔になれる、元気が出る、美味しいラーメンを。ありがとう、おじいちゃん。大好きです。